

保育の写真記録の整理と活用法 — 園内研究会における実践を通して —

川邊 尚子 (お茶の水女子大学附属幼稚園)

I. はじめに

保育者は保育の質の向上のために日々の保育を記録し、記録を基に省察したり課題を設けて話し合ったりしている。本園において、保育記録はそれぞれの保育者に任されており、他の保育者と共有するために改めて書き直したり書き加えたりすることも少なくない。この作業によってより省察が深まることや論点が明確になるという利点はあるが保育者間で共有するための記録を毎日欠かさず残していくことは難しい。また、日常的には保育者が自らの実践を写真で記録することが難しいことも多いため、フリーの立場にいる私が日々の保育実践や子どもの姿を写真で記録してきた。同時に、保育者間で共有するための保育記録をどのように作成し、活用することで、保育の実践の向上につながるかどうかについて様々な実践的な記録の試みを行ってきた。

具体的には、大量に蓄えられた日々の写真による保育記録をどのように整理し活用するのかという課題がある。保育記録を活用するためには、そのときに保育の中で課題となっているテーマについて保管された大量の記録の中からアクセスする方法が必要であるが、どのように整理しておき保管しておくだけでもいつでも当該の記録を参照できるのかは、未だ十分に解決ができていない。

そこで本研究では、保育者の日常的な写真記録の利用の現状とニーズを踏まえ、どのような整理法が適切なのかを検討すること、園内研究会や事例検討会で記録をどのように活用することで、議論に貢献できるのかについて明らかにしていきたい。

II. 研究の内容

- 1) 毎日、100～200枚程度の写真を撮っている。全6クラスの保育の流れや園舎・園庭の様々に繰り広げられる遊びの場面に配慮して記録を残す。
- 2) その日ごとのフォルダを作成し、写真データをデジタルメモリーに保存する。
- 3) その日ごとの写真をプリントアウトしたものに手書きでメモを残している。現在では35枚の写真をインデックスプリントしているが、写真も書き込む文字も小さいため保育者には読みにくい状態である。そのため読みやすい記録のフォーマットを検討したい。
- 4) さらに、時系列では引き出すことができない、テーマや課題に即して分類し、整理している。たとえば「季節の遊び」や「行事の様子」「探究する子どもの姿」「積み木遊びの変化」など、毎月行われる園内研究会や日常の保育の話題に着目したテーマを拾い出すことや、個々の保育者の関心に配慮する。
- 5) 研究会や話し合いでどのように写真を活用することができるかについて検討を行う。具体的には、各保育者から出された話題に対し、プロジェクターで写真記録を映し出し、話題が共有できるか、また、その共有した情報から話し合いがどのように行われたかを実践的に検討する。

III. 研究の結果

1) 写真記録の利点

園内研究会で写真を提示し話し合いを重ねる中で、保育者の感想から写真記録の利点が明らかになった。

- ・写真一枚から、遊びの中心にいる子どもだけでなく、その周辺の子どものことやその事実の背景となるものに気付く。
- ・記憶を呼び起こすことができると同時に、その時に考えたことまでが関連して思い出される。
- ・積み木やブロックなどで造ったものは、日々片づけるが、記録として残る。また振りかえることによって、その構造物の変遷が見える。
- ・同じ場面を見ていない者にも共有して、それぞれの視点から考えを出し合うきっかけを作る。

2) 写真記録を活用しやすくするために

ただ写真を撮りためておくだけでは、有効に活用することはできない。3年間記録を蓄積してきたが、どのような場面が記録されているかは、撮影者の記憶をたどっている状況である。

しかし、園内研究会や保育後の話の中で語られたテーマや子どもを踏まえながら撮影を重ね、話し合いの場では、保育者の話題に関連した写真をすばやく提示できるようにした。また、保育者それぞれの中に、私の撮っている写真が記録として位置付き、日々の記録や振り返りに活用されるようになってくると、過去の写真がそれぞれに記憶され、引き出されやすくなってきた。

3) インデックスの重要性

写真記録をさかのぼる際に重要な役割をしているのが、A4サイズに印刷しているインデックスである。3年分の写真はキングファイルに5冊分になる。量は多いが、週案を週の始めにファイルすることによって記憶をたどりやすくしている。また1枚に35枚の写真が印刷されているため、見渡すことで必要な写真を探し出しやすい。

4) 写真記録の効果

事例を話し合う時に、写真を見ることによって具体的に、保育者それぞれの思いや動きが、お互いに伝わりやすくなった。

また、行事やできごとの象徴的な写真を印刷し掲示すると、子どもにとっても記憶がよみがえったり、ほかの子どもに伝わったりしていく。保護者にも、具体的に子どもやその遊びの姿がイメージしやすくなる。訪問者にも、具体的な事例を通して保育理念や内容を伝えることができる。

写真を通して「わかる」ことが、より理解しようとする好意的な関係を広げている。

IV. まとめ

当初は、担任ではない立場で私がそれぞれのクラスの保育を理解し、撮影していくことは難しかった。しかし、写真を撮りながら子どもや保育者との関係が深まり、保育に入り込んでいくことで、全体を把握し、つなぎ、協働の関係ができてきたと思われる。